

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

目 次

総括研究報告書

1. 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究
呉大学看護学部 清 水 凡 生 96

分担研究報告書

2. 幼児期における情緒形成の基礎的研究
広島県立保健福祉短期大学小児看護学 竹 中 和 子、下 見 千 恵
呉大学看護学部 清 水 凡 生 100
3. 育児ストレスに関する父母間の比較分析
恵泉女学園大学人間科学部 大 日 向 雅 美 108
4. 育児期の母親の母親役割り受容と家族関係に関する研究
広島大学教育学部 岡 本 祐 子 111
5. 母子保健事業の効果的な展開に関する研究
広島大学医学部保健学科 田 中 義 人 118
6. 幼児期の自己制御機能の発達
和歌山大学教育学部 森 下 正 康 121
7. 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究
埼玉大学教育学部 首 藤 敏 元 131
8. 親子相互交渉と情動反応に関する研究
北海道大学教育学部 陳 省 仁 144
9. 乳幼児の情緒形成不全の早期発見方法
高知県立西南病院小児科 澤 田 敬 148

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

主任研究者 清 水 凡 生
(呉大学看護学部教授)

研究要旨 昨今、青少年の非行や犯罪的異常行動が問題になっているが、一般青少年にも基本的道徳観や他人への思いやりの欠如が目立っている。青少年の行動様式の決定には、乳幼児期の情緒形成が大きな決定因となると考えられているが、その科学的、実証的研究は乏しい。本研究は、幼児期の情緒形成の過程を多方面から検討し、情緒形成に及ぼす養育者を含む家庭環境や保育環境の影響を明らかにすることであるが、究極的には幼児期から青年に至る順調な心の発達に資する支援方途を確立することを目指している。

幼児期における情緒の形成は、個々の子どもの気質とパーソナリティを核とし、生育環境から多くの要因の影響を受けながら形成されていくと考えられているが、乳幼児期の初期における気質の研究から、情緒形成に大きな影響をもつ養育者や、これに関係する家族、社会の関与などについて多方面から検討し、養育者に対する有効な支援施策の企画や、保育実践に参考になる研究結果を得た。

分担研究者 大日向雅美(恵泉女学園大学人文学部教授)、岡本祐子(広島大学教育学部助教授)、田中義人(広島大学医学部保健学科教授)、森下正康(和歌山大学教育学部教授)、首藤俊元(埼玉大学教育学部助教授)、陳省仁(北海道大学教育学部教授) 澤田敬(高知県立西南病院小児科部長)

から、性格、情緒の形成に養育者、家族等や社旗環境が如何なる影響を及ぼすかを研究し、育児指導に資する結果をえようとするものである。

■ 幼児期における情緒形成の基礎的研究

本研究の目的は、乳幼児の気質の行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることである。本論文では、研究の第一段階として健康な新生児とその母親を対象に以下の調査を実施し現在も継続している。看護者による新生児行動特徴評定、授乳場面における相互作用評定と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査である。18組のケースを回収、分析した。その結果、看護者が評定した新生児の行動特徴は母親の認知と相関する項目もあり、今後ケース数を増やし因子分析等をおこなうとともに、母親の認知、1ヶ月時の乳児の行動特徴などとも関連させて分析考察していく。母親の出産体験においては、全体的には肯定的な回答傾向であった。特徴的だったのが痛みや苦痛といった否定的な内容と喜びや達成感といった肯定的な内容の両方が混在する点である。また、母親の育児意識や養育姿勢に関する記述は抽象的な内容の

■ はじめに

青少年の心の異常や非行はいうに及ばず、普通の青少年とされるものの中にも愛他心や正義感の欠けた行動が問題になるが、青少年の行動様式の決定には、幼児期の情緒形成が大きな決定因となると考えられている。本研究は、幼児期の情緒形成の過程を多方面から検討し、豊かな情緒形成がなされるための支援方途を確立することを目的として始めた。幼児期において情緒は、個々の子どもの気質とパーソナリティを核とし、生育環境から多くの影響を受けながら形成されていくと考えられている。しかし、これら情緒形成に関係する諸要因のかかわり方は未だ十分明らかではない。そこで、その基礎となる新生児期における気質の行動特徴と母親の育児姿勢、育児意識の調査

記述がほとんどであったことから、母親の育児意識はこれから形成していくと考えられ、諸要因については今後分析検討していく。母親の記述のなかで、個別には援助の必要が示唆される記述もみられたので、継続して関わっていく必要がある。また、今回は出産後からの調査であったが、妊娠期からの要因や分娩経過等についても関連が予測されたので、妊娠期からケースをおっていくことも検討したい。本論文では明確な示唆が提示できなかったが、今後も縦断的に調査実施し、新生児期の結果がその後の養育者の育児や子どもの行動特徴にどうつながっていくかということを中心に、援助の指針とする予定である。

■ 育児ストレスに関する父母間の比較分析

乳幼児期の子どもをもつ父親（117名）と母親（168名）を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

その結果、父親の育児に対する関心はけっして低くはないことがみられた。自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示された。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなっては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもってはいるものの、育児に追われる日常の苛立ちは、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であることを指摘した。

■ 育児期の母親の母親役割り受容と家族関係に関する研究

幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。本研究では、幼児をもつ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの統合・葛藤という視点からとらえ、母親役割受容と育児への積極的関与と家族関係の関連性について検討した。3～5歳の幼児をもつ147名の母親を対象に質問紙調査を行った。対象者は、Ⅰ統合型、Ⅱ伝統的母親型、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型の4タイプの分類された。主要な結果は以下のとおりである。

1) Ⅰ統合型の母親は、Ⅳ未熟型の母親よりも家庭生活によく満足しており、Ⅱ伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。

2) 家族とのかかわり方や家族の認知のし方は、4タイプ間で著しい相違が見られた。Ⅰ統合型が、夫を最も肯定的に受けとめており、育児や家族に対する積極的関与が最もよくできていた。Ⅳ未熟型は、夫・子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分である者が最も多かった。

これらの結果を総合して、幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

本研究の成果は、今後、育児への積極的関与を促進する家族環境に関する基礎資料として、母親・父親を対象とした啓蒙・教育へ活用が可能である。将来的には、父親・母親が育児に等しく関心と責任をもつ家庭経営実践へ発展させたい。

■ 母子保健事業の効果的な展開に関する研究

広島県内に住む乳幼児をもつ母親2,700名を対象に、育児に関するアンケート調査を行った。

働いている母親が、育児に関して職場に望むこととして、子どもが病気の時や学校行事などで休みが気兼ねなく取れるように希望しているものや、企業における保育施設の整備を望む声が多かった。育児に関して社会に望むこととして、広い公園

や安全で静かな環境、保育施設の充実、職場での育児休業、育児手当などの充実、育児休業の保証、育児中の労働時間の短縮、出産後の再雇用制度の保証、相談窓口の充実、などであげられた。

育児に関する不安や悩みでは、育て方に関する悩み、仕事との両立の困難さ、生活のゆとりのなさ、などが目立っていた。

母親が育児そのものにストレスを感じている現状は、今回の調査結果でも、自分の感情でしかってしまう、イライラして子どもに八つ当たりしてしまう、生活に余裕がない、自分の時間がない、夫が協力してくれない、自分ひとりだけで育てているような気がする、などの悩みや不満がみられることから窺える。

各機関の連携で、開かれた保育所、延長保育、病児保育、小児科医による育児相談の充実、保育所での検診業務、相談事業の拡充、さらには企業内保育施設の充実などが望まれる。

■ 幼児期の自己制御機能の発達

幼児の自己制御機能の発達をめぐって、思いやりや攻撃性、親子関係との関連について検討した。3歳10ヶ月～6歳10ヶ月の幼児の母親316名を対象に評定を求めた。その結果、(1)自己抑制は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子、自己主張は「正当な要求」「能動性」の2因子から成っていた。自己抑制機能は年中から年長にかけて発達するのに対して、自己主張機能は年齢差がなかった。(2)自己抑制機能が思いやりや攻撃性と関連が深かった。(3)男児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能や、時には自己抑制機能の発達にプラスの影響を与える可能性があった。女児の場合、受容的態度は子どもの自己抑制機能の発達にプラスの影響を、統制的態度や力中心の養育スタイルは自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響をもたらす可能性のあることが明らかとなった。

■ 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

本研究は、家庭内の人間関係と、幼児の思いやりおよび正義感の発達との関連を検討することを目的とした。研究1では、親子間と夫婦間での共感経験から家族関係をとらえ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、

それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。研究2では、幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。親子の共感関係と親のしつけの態度は、主に幼児の自己抑制的な協調的行動と関連していた。また、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。

■ 親子相互交渉と情動反応に関する研究

乳幼児期において養育者との相互交渉における情動の制御の過程はのちの人格形成及び対人関係のみならず子どもの認知的発達にも大きな影響を及ぼすのである。本研究は就学前までの子どもと養育者との日常生活でのコンフリクト場面に焦点を当て、短期縦断法を用いて、子どもの情動反応と養育者のしつけ方略との関係を明らかにしようとする。初年度は調査・面接用紙の作成と縦断観察の内容を決めるため、少数の1.5と3歳児とその母親に面接を行い、コンフリクト場面についての情報を得た。

■ 乳幼児の情緒形成不全の早期発見方法

乳幼児期に安定した親子関係を確立し、心の安全基地(ボールビー)を作ることで、思春期以後の精神的混乱の大部分は予防できる。この目的を果たすために幼児期に満たされていない心の叫びや、乳幼児期の不十分な親子関係を早期に発見し、早期に適切な介入をする事が大切である。

1) 幼児は心的外傷を受けストレスが貯まると心身症、気になる癖、異常行動(以下まとめて心身症とする)となる。心身症は「このままでは一人前の大人になれません。助けて下さい」という心の叫びだと言われている²⁾。親子関係で心が満たされると心身症は消失する³⁾。幼児の心身症を利用したチェックリストを作り、現在保育所で調査中である。

2) 心が満たされなく、心の安全基地を作れない不安定な母子関係を早期に発見するためAIDS尺度を利用し、現在保育所で調査中である。

3) 子どもの心は両親に甘えることで満たされ、ストレスの症状である心身症は消失する。しかし子どもの甘えを十分に受け入れることが出来ない父母がいる。このような父母は三つのタイプに分けられる。

①現在辛いことを抱えて悩んでいる。

②子ども時代に辛いことがあり、その心的外傷が未だに癒されていない。

③子どもにストレスを与える世代間伝達（親は自分が子どもの時代に両親から育てられたと全く同じように、無意識に自分の子どもを育てる）がある。

育児困難な父母のチェックリストを利用し、早期に育児困難な父母を発見し、親子介入する必要がある。現在産科で調査中である。

以上三種のチェックリストを利用し、心が満たされていない幼児、心の響き合いが出来ていない親子、子どもを受け入れる事が出来ない親子を早期に発見し、早期に介入する方法を探っていく予定である。

■ 結 論

本研究は乳児期から幼児期におよぶ発達を視野におき、心の健全育成に資する成果を得るための研究として企画したものであるが、乳幼児期の初期における情緒形成の基礎的研究から、情緒形成に大きな影響をもつ親や、これに関係する家族、社会の関与などについて多方面から検討した。今年度は初年度であり、研究方法の模索に終わった研究もあるが、これらは、今後の縦断的研究の基礎をなす研究結果となった。これらを基に育児支援施策の企画に参考資料を提供すべく研究を続けたい。

幼児期における情緒形成の基礎的研究

研究協力者 竹 中 和 子、下 見 千 恵
(広島県立保健福祉短期大学)

主任研究者 清 水 凡 生
(呉大学看護学部)

研究要旨 本研究の目的は、乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることである。本論文では、研究の第一段階として健康な新生児とその母親を対象に以下の調査を実施し現在も継続している。看護者による新生児行動特徴評定、授乳場面における相互作用評定と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査である。18組のケースを回収、分析した。その結果、看護者が評定した新生児の行動特徴は母親の認識と相関する項目もあり、今後ケース数を増やし因子分析等をおこなうとともに、母親の認識、1ヶ月時の乳児の行動特徴などとも関連させて分析考察していく。母親の出産体験においては、全体的には肯定的な回答傾向であった。特徴的だったのが痛みや苦痛といった否定的な内容と喜びや達成感といった肯定的な内容の両方が混在する点である。また、母親の育児意識や養育姿勢に関する記述は抽象的な内容の記述がほとんどであったことから、母親の育児意識はこれから形成していくと考えられ、諸要因については今後分析検討していく。母親の記述のなかで、個別には援助の必要が示唆される記述もみられたので、継続して関わっていく必要がある。また、今回は出産後からの調査であったが、妊娠期からの要因や分娩経過等についても関連が予測されたので、妊娠期からケースをおっていくことも検討したい。本論文では明確な示唆が提示できなかったが、今後も縦断的に調査実施し、新生児期の結果がその後の養育者の育児や子どもの行動特徴にどうつながっていくかということを明かにし、援助の指針とする予定である。

■ 問題と目的

子どもの情緒発達に生育環境が大きく影響していることはいうまでもないが、とりわけ発達初期から母親を中心とする子どもを取り巻く人的環境は、人格形成の基盤をなすもっとも重要な要因である。しかしながら、子どもの情緒発達や人格形成の過程は、多くの要因がダイナミックに影響しあっていることから、いまだ明らかになっていない点が多い。

近年、乳児は生後まもなくから有能で個性的であるということがいわれてきている。いいかえれば、乳児が単に養育者から影響を受けるだけではなく、乳児の様々な反応が養育者に影響を与えていることである(クラウスとケネル¹⁾、古澤²⁾、古沢³⁾。新生児期の行動特徴については、ブラゼルトンの新生児行動評価(NBAS)⁴⁾があるが、評価者が限られることや簡便でないこと、また新生児期は外的環境への適応期間であるとうことで、新生児ひとりひとりの個性をとらえるということは経験

的レベルに留まっている。また、陳と呉⁵⁾は、新生児行動特徴を新生児の吸啜中断反応様式での「易刺激性」としてとらえ、1ヶ月2ヶ月3ヶ月時の行動観察により「易刺激性」に一貫性がみられたという報告もある。このように、新生児期の行動特徴とその後乳幼児期の行動特徴、気質の特徴等との関連性についての研究は、断片的な報告はあるが、系統だっって縦断的分析検討している研究はほとんどみられない。

母親をはじめ養育者の育児に対する考え方や「どのような子どもに育てたいか」という養育姿勢は、養育者自身のパーソナリティや育児経験、家族関係等を基盤としているが、日々の相互作用を通して子どもの個性にも影響されて変容していくと考えられる。いいかえれば、養育者はそれぞれ育児意識や養育姿勢をもって育児に臨み、子どもの情緒発達や人格形成に大きな影響を与えているが、必ずしも養育者の思惑通りにはならず、子どもの個性に影響され変化していくと考えられる。一方では、自分の育児姿勢、育児意識を変容させず、子

どもを自分の思いどおりに育てたいとする養育者もいる。これら両者によって育てられた子どもの情緒形成過程を縦断的に研究することは、養育者の子どもへの対応と情緒形成の過程との関係を明らかにすることになる。高岸ら⁶⁾は、年長幼児の行動上の問題や親の養育態度の問題と子どもの気質との関連性について検討した結果、幼児の"difficult child"の気質的特徴と行動上の問題、母親の不満的態度、父親の不一致的態度との間に有意な関連があったという。また、新生児期の行動特徴が看護者の肯定的あるいは否定的な認知・評価と関連があったという竹内⁷⁾の報告にあるように、親の養育姿勢と子どもの個性や親子の関係性は、新生児期から形成されていくと考えられる。したがって新生児期から縦断的に調査し、それらの要因を検討していくことが重要で、その結果は、今日の子どもと家族を取り巻いている諸問題の解明のみならず、子どものより健全な成長発達のための育児環境の整備や家族支援のあり方についての指針としていきたい。

本研究では、乳幼児の行動特徴と保護者の心身の状態のみならず、養育姿勢や育児意識を新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を明らかにすることを目的とする。本論文では、研究の第1段階として、新生児の行動特徴と、母親の育児意識、養育姿勢、出産や赤ちゃんに対する感情や認識との関連性について行った調査内容について検討する。なお、本調査は継続中であるため、今回の報告では、主として、回答の全体的傾向や、個別のデータの分析等から今後の調査内容について方向性について述べる。

■ 用語の操作的定義

赤ちゃん：新生児、乳児に対応することばであるが、ここでは、主としてわが子としての新生児、乳

児とする。

養育者：ここでは両親をさし、看護者は含めないものとする。

看護者：看護婦(士)あるいは助産婦あるいは保健婦(士)とする。

行動特徴：特に乳児および年少幼児の場合に気質や性格特性に対応するものとする。

育児意識：育児に対する考え方とする。

養育姿勢：「どんな子どもに育てたいか」という養育者の思いや態度とする。

■ 研究方法

1. 被験者

出生より10日目までの健康な新生児(在胎週数37w5d～42w6d, 生下時体重2, 672g～3,640g, Apgar score 9点以上)とその母親(初産婦6名, 経産婦12名/年齢24歳～39歳, 平均年齢28.5歳, SD = 4.42) 18組。

2. 調査期間

1999年2月25日～1999年3月14日

3. 調査場所

Y医院およびM病院産科病棟および新生児室(Y医院は母児同室制、M病院は母児別室制をとっている)。

4. 質問紙

1)新生児行動特徴評定表は、ブラゼルトンの新生児行動評価(NBAS)⁴⁾の評価内容や、庄司²⁾の「新生児行動様式質問紙」の項目を参考にして作成したもので、新生児の身体生理的状态に関連した9項目と反応性や泣きなど心理的状态に関連した項目15項目の計24項目からなる。各項目は「全くあてはまらない」から「あまりあてはまらない」、「どちらと

表1. 新生児行動特徴評定表項目

カテゴリー	身体生理的側面			心理社会的側面					泣き方
	栄養(排便)	睡眠-覚醒	運動-筋緊張	外的刺激への反応性	刺激にたいする順応性	刺激に対する興奮性や泣きやすさ	泣いた状態からの鎮静のしやすさ	機嫌	
行動特徴 評価項目	(1)しっかり吸乳する	(3)睡眠-覚醒のリズムは安定している	(6)手足を活発に動かす	(10)がらがらや人の声など音のするほうに顔をむける	(13)ちょっとした音にも驚く	(16)ちょっとしたことですぐに泣く	(17)泣き出してもすぐに泣きやむ	(18)表情が穏やかである	(20)あまり泣かない
	(2)母乳やミルクの飲みはよい	(4)眠っているときはぐっすり眠る	(7)四肢の動きがなめらか	(11)人の顔をじっとみつめる	(14)顔を拭くと嫌がる			(19)笑顔をよくみせる	(21)泣き声は激しい
		(5)眠っていることが多い	(8)抱っこすると落ちる	(12)目と目がよく合う	(15)新しい刺激にすぐに慣れて落ちる				(22)泣き声は強しい
			(9)抱っこするとはじめからだを反らせる						(23)泣き声は甲高い
								(24)泣いている持続時間が長い	

もいえない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5段階で評定する(表1)。

2)新生児と母親の相互作用評定表

授乳場面における新生児と母親の相互作用に関するもので、母子の協応性を問うている2項目と主として母親の赤ちゃんへの働きかけを問うている2項目、母親の疲労について問うている1項目の計5項目からなり、「新生児行動特徴評定表」と同様に、5段階尺度で評定する(表2)。

3)母親に対する出産・育児に関するアンケート

(1)出産体験後の感想、(2)赤ちゃんへの思い、(3)身体の調子、(4)母親としての実感、(5)育児について、(6)赤ちゃんの父親の反応、(7)赤ちゃんに対する認識、(8)今の気持ち、(9)赤ちゃんへの感情についての項目で、計76項目からなる。(1)は自由記述、(2)は文章完

した。調査時間等を配慮して、質問項目は最小限とし、また、縦断的研究であることから記名方式をとったが、個人のデータの守秘に努めた。

4. 分析方法

1)5段階尺度で回答をもとめた各項目は、「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点「あまりあてはまらない」を2点「全くあてはまらない」を1点として分析した。今回は、調査実施途中の結果報告で、被験者数が少なく、主に全体の傾向や各ケースの質問項目についての検討を行った。

2)「出産・育児に関するアンケート」で、出産後の感想の自由記述や、赤ちゃんへの思いについての文章完成形式の記述は。研究協力者2名が個別にKJ

表2. 新生児と母親の相互作用評定表(授乳場面)

カテゴリー	協応的関わり		母親からの積極的関わり		母親の疲労感
授乳場面における相互作用評価項目	(1)母子ともにゆったりしている	(2)母子はよく見つめ合っている	(3)母親はよく語りかけている	(4)母親はよく微笑んでいる	(5)母親は疲労が感じられる

成法、(3)~(9)は5段階尺度による回答の方式をとった(後者の項目の内容は表3に示す)。また、(7)の項目は、看護者による「新生児行動特徴評定表」と一部対応した内容とし、(8)はSTAI⁴⁾を参考にできるだけ項目数が少なくなるように配慮し、比較的答えやすいと思われる同数の肯定的項目と否定的項目を設けた。さらに、(9)の項目は、花沢¹⁰⁾の「対児感情評定尺度」の項目より、回答しやすいと思われる項目を検討し、接近項目と回避項目が同数となるように抽出し、接近項目とされていた項目は、肯定的項目と、回避項目とされていた項目は否定的項目として整理した。

3. 調査手続き

1)同一新生児について看護者1名または2名が、「新生児行動特徴評定表」にしたがって生後2日目以降にそれぞれ評定を実施した。

2)同一組みの新生児と母親について、看護者1名または2名が、それぞれ「授乳場面における母子相互作用評定表」にしたがって、生後4日目より退院までの期間実施した。

3)各施設の看護者が退院前の母親に「出産や育児に関するアンケート」を個別に配付し、退院までに回収した。

なお、ご協力頂いた施設および母親や看護者には、本研究の主旨にご賛同いただいたうえで実施

法11,12,13)に基づきグルーピングした後、両者の結果を合わせて、不一致の部分は検討結果として示した。

3)その他で記述のあった自由記述部分は、特にグルーピング等はせず、そのまま、個別のケースを見ていく際に検討する資料とした。

4)母児同室制(13組)と母児別室制(5組)のケースで違いがあるかどうかについて検討した。

■ 結果と考察

1. 新生児の行動特徴について

表2に示すように、行動特徴項目の評定が「どちらともいえない」をはさんで両極にまたがる、つまり、得点範囲が4点または5点から2点または1点の項目は、授乳に関する項目(1)しっかり吸啜する、(2)母乳やミルクのみはよい、睡眠-覚醒についての項目(3)睡眠-覚醒のリズムは安定している、(5)眠っていることが多い、刺激に対する順応性に関する項目(14)顔を拭くと嫌がる、鎮静性に関する項目(17)泣き出してもすぐに泣きやむ、泣きに関する項目(21)泣き声は激しい、(23)泣き声は甲高いであった。授乳に関する項目の評定は、項目(1)(2)の評定は相関($r=.79, p<.0001$)しており、特に項目(1)(2)のいずれかの得点が2点と低かった2事例では、母親が扁平乳頭のため授乳がうまくいって

幼児期における情緒形成の基礎的研究

表3. 母親に対する育児に関する質問紙項目

カテゴリー	身体の調子	母親としての実感をした時	育児について	赤ちゃんに対する父親の様子
項目	(1)母乳はよく出る (2)よく眠れる (3)お乳が痛い (4)体がだるい (5)腰が痛い	(6)妊娠に気づいたとき (7)胎動を感じたとき (8)超音波で胎児を見たとき (9)陣痛がはじまってから (10)出産の際 (11)赤ちゃんと対面したとき (12)抱っこしたとき (13)授乳したとき (14)まだ実感がわからない	(15)育児は楽しみだ (16)育児は大変だ (17)仕事や家事との両立ができるかどうか心配 (18)この子とならどんな困難にも耐えられる (19)この子と一緒に成長したい (20)子どもにいい環境を提供するのは親の責任だ (21)子どもは愛される存在 (22)この子は私の生きがい (23)育児や家事は夫と協力してするつもりだ (24)この子にはできる限りの愛情を注ぐ (25)できるだけ早く仕事に復帰したい (26)育児に専念したい (27)この子中心の生活になるのはしかたがない (28)この子を見ていると母親の私がいなくてはと思う (29)この子は私のことが好きである。 (30)これから育児がうまくやっていけるか心配である (31)私は母親にむいている	(32)誕生を喜んでいる (33)とてもほりきっている

カテゴリー	赤ちゃんに対する認知	母親の今の心理状態	
		ポジティブ項目	ネガティブ項目
項目	(34)母乳(ミルク)をよく飲む (35)元気がいい (36)よく笑顔をみせる (37)私のことをよくみる (38)抱っこすると安心する (39)話しかけるとじっと聞いているように感じる (40)母親だとわかっていて感じる (41)よく眠る (42)よく泣く (43)おとなしい子だ	(44)たのしい (47)満足している (48)ゆったりした気持ちである	(45)不安である (46)緊張している (49)心配である

カテゴリー	赤ちゃんを思い浮かべたときの感じ	
	ポジティブ項目	ネガティブ項目
項目	(50)あたたかい (52)うれしい (53)いじらしい (56)ほほえましい (58)ういういしい (61)やさしい (63)うつくしい (65)すばらしい	(51)よわよわしい (54)やかましい (55)あつかましい (57)むずかしい (59)めんどくさい (60)こわい (62)うっとうしい

ないことや、分娩時間が長かったことが看護師からのコメントにあり、それらの影響も考えられる。

2. 授乳場面における母子相互作用について

5項中4項目については、全事例について「非常にあてはまる」かまたは「ややあてはまる」と評定

しており、肯定的な評価であつた。母親の疲労についての項目では、「ややあてはまる」から「あまりあてはまらない」までの範囲で評価され、個人差がみられた。母児同室の場合は母子との相互作用は促進される一方で疲労の問題がよくいわれているが、この18ケースでは母児同室制か母児別室制

かによる違いはみられなかった。

3. 出産・育児に関する母親の思いについて

1) 出産後の感想

18ケース中15名の母親からの回答が得られた。記述内容の多くは、分娩に伴う痛いや苦痛や妊娠期のつらさなどの否定的な感想と、安堵感や出産に対する感動といった妊娠・分娩に対する肯定的な感想であった。興味深いことに、9ケースについては、肯定的と否定的両方の感想が並列して述べられており、母親にとって出産は、苦痛を伴うけれどもそれを乗り越えてきたことから得られる喜びや安堵感が大きいものと考えられる。その他、分娩体験にとどまらず母親としての責任や子どもへの愛着、これからの育児に対する不安や期待についての記述もあった。「母親としての責任」に思いが向いている2名母親は、生後6日目と9日目に、「育児に対する不安」を述べている3名の母親は、生後6日目(2名)と11日目にアンケートに記入しており、回答内容の差は、実施時期の影響も考えられる(記入時期は生後3日目～11日目)。しかしながら、生後9日目に記入した母親に「不安」の記述はなかったことから、今後ケースを増やして検討する必要がある。また、いずれにしても、15名中3名の母親が、今後の育児に対する不安を表出していることは、支援の必要性があると考えられる。

2) 赤ちゃんへの思いについて(文章完成法形式)

① “赤ちゃんの第一声は”

全ケースから回答が得られた。11名が、泣き声そのものについて表現している。また、声の大きさをあげ、赤ちゃんが元気に生まれたという安心と誕生の感動を表現した母親もいた。多くの母親が分娩体験とあいまって赤ちゃんの泣き声そのものが印象として残っているようである。

② “私が最初に赤ちゃんを見たときの印象は”

18ケースすべての母親が回答している。赤ちゃんに対する客観的な印象の表現、無事生まれた安堵感の表出、さらに子どもへの愛着や、生命の神秘の感動、これからの育児に対する楽しみなど具体的な内容の表現もあった。「かわいい」という赤ちゃんへの愛着を感じている母親は3名で、そううち1名は初産婦であった。「客観的印象」についても、初産婦、経産婦の両者が表現している。出産経験の有無により回答内容の違いがみられたのは、初産婦に「安堵」に関する記述がなく、「生命の神秘」に関する内容の記述が比較のみられたことである。

③ “私が最初に赤ちゃんを抱いた時の印象は”

18ケースすべての回答が得られた。「かわいい」

といった赤ちゃんへの愛着を表現した母親が多かった。前項の“最初に赤ちゃんを見たときの印象”では3名だったが、8名と“抱っこする”ことで赤ちゃんへの愛着表現が増加している。その他、「軽い」など感覚的印象を表現した回答があった。「軽い」と表現している母親と「重い」と表現している母親の両方がいたことは、分娩状況との関連や今後の育児への影響が予測される。

④ “私は赤ちゃんが泣くと”

18ケースのうち17ケースについて回答が得られた。分析の結果、泣きに対する母親の養育行動に至る一連プロセスが得られた。赤ちゃんが泣くと母親は「不安」になるが、対処行動をとりながら、赤ちゃんの要求を考え、行動する。「不安」を表出した母親は経産婦で1名みられたが、初産婦では半数を占めていた。初産婦は「不安」を感じながらも、赤ちゃんが何を要求しているかを考えている。経産婦ではほぼ3割が「行動」についての記述があるが、初産婦ではみられなかったことから、経産婦に比べ行動レベルへの発想が展開にいくと考えられる。

⑤ “私は赤ちゃんが泣くときは”

18ケース中回答が得られたのは15ケースであった。多くの母親が母性的対応を表現している。それは授乳するなどの生理的欲求への関わりのみならず、抱っこしたりあやしたりといった心理的欲求への関わりについて、多くの母親が回答している。

⑥ “私が声をかけると赤ちゃんは”

18ケース中17名の母親が回答したが、そのほとんどが視覚的反応で、「母親だとわかるかのよう」というような相互作用的解釈がみられる。また、回答したすべての母親が、自分の声かけに対する赤ちゃんの反応として受けとめた表現をしている。さらに、愛着として発展させた記述もみられた。

⑦ “私が赤ちゃんを抱くと”

18ケース中回答が得られた15名の母親は、前項の“私は赤ちゃんが泣くときは”と同様に、母親の抱っこに対する赤ちゃんの反応としてとらえた表現をしている。しかしながら、視覚的反応をあげたものはなく、「赤ちゃんの安定」が得られたとして表現している。そのことは“抱っこ”が、“声かけ”という聴覚的刺激とは異なる触覚的、感覚運動的刺激であることが反映していると考えられる。さらに、赤ちゃんの安定した反応や母親求める肯定的な反応は、母親としての実感や幸福感をもたらしているようである。1ケースに「ぐずる」という否定的な記述があったが、その意味の詳細について

ては明らかではないが、今後継続的に経過を追っていききたい。

⑧” 赤ちゃんが機嫌がよいときは”

回答は18ケース中16ケースについて得られた。大きく、赤ちゃんの行動(反応)と母親自身を感じることや行動を表現したものに分けられる。例えば赤ちゃんの「笑う」という反応は、母親に「うれしい気持ち」をもたらし、「ニコニコ」になり、その母親を見た赤ちゃんがまた「笑う」といったように、一連の母子相互作用が展開している。また、「安心できる」「ほっとする」と答えた2名の母親は緊張が高いことが予測されたが、後述する「今の母親の不安状態」における肯定的得点の平均は4点と否定的得点平均の3点をしのぐ。また、対児感情との関連性もみられなかった。しかしながら、新生児の行動特徴評定結果で、「顔をみつめる」等反応性の項目における得点が低く、「顔を拭くと嫌がる」「泣き声は激しい」「泣き声は甲高い」の項目で高い得点となっていることから、赤ちゃん側の過敏さや育てにくさなどが背景にある可能性もある。また、「安心」と表現した2名の母親はいずれも母児別室制をとっている病院であり、今後は各施設の規模や体制、ケア方針等についても検討していく必要がある。

⑨” 赤ちゃんの性格は”

18ケース中回答が得られたのは15ケースで、そのうち7名の母親が、肯定的な性格としてあげている。母親の希望として表現しているものもあった。

⑩” 私は赤ちゃんに将来”

18ケース中15名の母親の回答があった。「健康な子」「幸せな人生」などだれにでもあてはまるような漠然とした思いがほとんどであった。早期新生児期では、身体症状や育児のことに気を取られたり、幸せをかみしめたりする時期であると考えられ、具体的な表現がみられなかったのであろう。したがって、母親をはじめとする養育者の育児に対する意識や養育姿勢がいつ頃から具体的になり、それはまたどのように形成されていくのかということも今後の検討課題として残る。

3)母親の身体の調子

5項目全部について、「まったくあてはまらない」または「あまりあてはまらない」から「非常にあてはまる」または「ややあてはまる」までの回答がみられ、個人差が大きい。母児同室制か、母児別室制かで得点の平均値を比較したところ、(2)よく眠れるの項目について両群に有意な差がみられた。従来から、母児同室制の短所としていわれていることと矛盾しない結果となったが、相互作用評定にお

ける「母親は疲労が感じられる」項目や、他の身体の調子に関する項目については、有意な差はなかった。

4)母親としての実感

ほとんどの母親が「妊娠に気づいたとき」から母親としての実感があり、出産後の今も「まだ実感がわからない」をあてはまるとした母親はいなかった。母親としての実感の平均得点で、最も高かったのは、(13)授乳したときで、「あてはまらない」とした母親はいなかった。「あまりあてはまらない」とする回答もあったが、以下平均得点の高い項目は、(12)抱っこしたとき、(11)赤ちゃんと対面したとき、(10)出産のとき、(8)超音波で胎児をみたとき、(7)胎動を感じたときと続く。いずれも、視覚的、触覚的、感覚運動的に胎児あるいは新生児と関わっており、特に授乳や抱っこといった触覚的、感覚運動的感覚モダリティを介して展開される相互作用は、母親としての実感を強化する大きな要因であることが予測される。

5)育児について

「あてはまる」から「あてはまらない」の両極にわたる回答があったのは、(16)育児は楽しみだ、(17)仕事や家事との両立ができるか心配、(25)できるだけ早く仕事に復帰したい、(26)育児に専念したい、(27)この子中心の生活になるのはしかたがない、(28)この子を見ていると母親の私がいなくてはと思う、(29)この子は私のことが好きである(30)これからの育児をうまくやっていけるか心配である、(31)私は母親にむいているの項目であった。今回は、協力者へのプライバシーや負担を考慮し、母親の職業や家庭環境については聞いていないが、第2段階以降に調査協力者に了解の上情報を得る予定であるので、詳細はその後分析検討することとする。その他の項目は赤ちゃんの育児に対する肯定的な認識で、ほとんどが「非常にあてはまる」か「ややあてはまる」であった。

6)赤ちゃんの父親について

2項目ともほとんどが「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」の回答で、肯定的にとらえている。今後は、育児参加や母親のサポートとして役割が期待される可能性があり、とらえ方の変化についても検討していきたい。

7)今のあなたの赤ちゃんについて

「あてはまる」から「あてはまらない」の両極にわたる回答がみられているのは、(34)母乳(ミルク)をよく飲む、(36)よく笑顔をみせる、(41)よく眠る、(43)おとなしい子だ、の4項目で、他の項目は、「どちらでもない」から「非常にあてはまる」の範囲で

全体的に肯定的にとらえている。新生児行動特徴評価と対応する項目で、相関がみられたのは、新生児行動特徴評価項目の(5)眠っていることが多いと母親による評価項目(43)おとなしい子だ($r=.83, p<.0001$)、新生児行動特徴評価項目の(6)手足を活発に動かすと母親による評価項目(34)母乳(ミルク)をよく飲む($r=.47, p<.05$)、新生児行動特徴評価項目の(11)人の顔をじっとみつめると母親による評価項目(37)私のことをよく見る($r=.50, p<.04$)、新生児行動特徴評価項目の(16)ちょっとした音にも驚くと母親による評価項目(38)抱っこすると安心する($r=.57, p<.02$)、新生児行動特徴評価項目の(14)顔を拭くと嫌がると母親による評価項目(39)話し掛けると聞いているように感じる($r=-.66, p<.003$)、新生児行動特徴評価項目の(15)新しい刺激にすぐ慣れて落ち着くと母親による評価項目(37)私のことをよくみる($r=.57, p<.02$)、新生児行動特徴評価項目の(16)ちょっとしたことですぐに泣くと母親による評価項目(39)歯話しかけるとじっと聞いているように感じる($r=.51, p<.03$)、新生児行動特徴評価項目の(17)泣き出してもすぐに泣き止むと母親による評価項目(42)よく泣く($r=-.55, p<.02$)、(43)おとなしい子だ($r=.51, p<.03$)、新生児行動特徴評価項目の(18)表情が穏やかであると母親による評価項目(42)よく泣く($r=-.50, p<.03$)、新生児行動特徴評価項目の(21)泣き声は激しいと母親による評価項目(39)話しかけるとじっと聞いているように感じる($r=-.55, p<.02$)、新生児行動特徴評価項目の(22)泣き声は弱弱しいと母親による評価項目(34)母乳(ミルク)をよく飲む($r=-.48, p<.04$)、であった。新生児の行動特徴についての評価が、看護者と母親である程度相関している結果がでたが、今後ケース数を増やして、因子分析等をおこなっていく予定である。

8)母親の心理状態

(47)満足しているの項目以外は、「あてはまる」か

ら「あてはまらない」の両極にわたる回答がみられた。(47)満足しているの高得点は、出産後の感想や、赤ちゃんへの思いについての結果と対応する。

9)対児感情について

肯定的項目と否定的項目についての各ケースの平均値を求め、前項目の8)母親の心理状態の肯定的項目の平均値と否定的項目の平均値の相関をみたところ、母親の心理肯定的項目得点と、対児感情否定的項目得点に負の相関が($r=-.48, p<.04$)、また、母親の心理否定的項目得点と、対児感情否定的項目得点とに相関($r=-.51, p<.03$)がみられた。つまり、母親の心理状態が、より肯定的傾向にあるほど、赤ちゃんに対する否定的感情の度合いが低くなり、母親の心理状態が否定的傾向にあるほど、赤ちゃんに対する否定的な感情の度合いが高くなるということである。母親の特に不安などの心理状態は、赤ちゃんに対していざ感情に反映すると考えられる。

■ 研究の限界と今後の研究計画

今回の報告では、調査が継続中で収集したケース数が18と少なく、質問紙項目の因子分析や新生児の行動特徴と母子相互作用、母親の体調や出産体験、対児感情、育児姿勢や育児意識間の相関についても分析できなかった。また、今回は、被験者や評価者となる看護者への負担をなくすために、の妊娠分娩経過や家族関係、育児環境については、問わなかったが、今後ケースを増し分析を深めるとともに、継続して協力の得られたケースについては、詳細に分析検討していく予定である。

(謝辞：本調査にご協力いただいた松田病院松田修典院長をはじめスタッフの方々、ならびに山下産婦人科内科小児科医院、山下通隆院長をはじめスタッフの方々、アンケートにお答えいただいたお母さまにこころより感謝申し上げます。)

参考文献

- 1) Klaus, M.H., & Kennell, J.H.: Parent-Infant Bonding. 2ed. The C.V. Mosby Company, 1985. (竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子 (訳): クラウスケネル親と子のきずな. 医学書院, 1985.)
- 2) 古澤頼雄: 新生児の個体反応性. 心理学評論, 22 (1), 1979.
- 3) 古澤頼雄: 発達初期における母子交互性—新生児・乳児の養育者に及ぼす影響を中心に—. 教育心理学研究, 23, 1975.
- 4) Brazelton, T.B., & Nugent, J.K.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. 3rd edition. Mac Keith Press, 1995. (磯山富太郎 監訳, 大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉 訳: ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版. 医歯薬出版株式会社, 1998.)
- 5) 陳省仁, 吳敬慈: 「泣き」や「ぐずり」と乳児の発達. 三宅和夫 (編) 乳幼児の人格形成と

- 母子関係. 東京大学出版, p.p.77 - 94, 1991.
- 6)高岸由香, 宅見晃子, 稲垣由子, 中村肇: 幼児の自律機能・行動上の問題・気質と親の養育態度の関係. 小児の精神と神経, (4), 315 - 325, 1996.
 - 7)竹内ますみ: 新生児期における行動特徴-ブラゼルトン新生児行動評価尺度と看護婦による対乳児認知との関連-. 心理学研究, 55 (5), 1984
 - 8)庄司順一・副田敦裕・岩崎亜美・前川喜平: 子どもの気質に関する研究(2)-母親がとらえた新生児の行動特徴の検討-. 日本総合愛育研究所紀要, 33, 245 - 249, 1996.
 - 9)堀洋道・山本真理子・松井豊 (編): 人間と社会を測る. 心理尺度ファイル. 垣内出版株式会社, 1994.
 - 10)花沢成一: 母性心理学. 医学書院, 1992.
 - 11)川喜多二郎: 発想法と創造性開発のために. 中央公論社, 1993.
 - 12)川喜多二郎: 続・発想法とKJ法の展開と応用. 中央公論社, 1993.
 - 13)川喜多二郎: 川喜多二郎著作集 5KJ法と渾沌をして語らしめる. 中央公論社 1996.

育児ストレスに関する父母間の比較分析

分担研究者 大日向 雅美
(恵泉女学園大学人文学部教授)

研究要旨 乳幼児期の子どもをもつ父親(117名)と母親(168名)を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

その結果、父親の育児に対する関心はけっして低くはないことがみられた。自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示された。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなつては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもっているものの、育児に追われる日常の苛立ちは、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であることを指摘したい。

■ 研究目的

近年、育児に対するストレスや嫌悪感を強める母親の増加現象が注目される。そうした母親の育児ストレスの背景をさぐると、母親の育児負担がいかに大きいか明らかである(参考:大日向雅美1995、1999)。母親の育児負担の軽減のためにも父親の育児参加が求められるところであるが、果たして父親には育児ストレスはないのだろうか。本研究は父親の育児ストレスの程度は母親とどのような違いがあるのか、また相違があるとすればその理由は何かを明らかにすることを目的とするものである。育児に参加する父親も漸増傾向にある昨今であり、父母の心身の安定は乳幼児の情緒の安定にとって重要な課題であると考えられる。育児に悩む親に対する支援のあり方を検討するためにも、父母の育児ストレスの現状を把握し、その背景要因に関する分析を行うことを目的とした。

■ 研究方法

乳幼児期の子どもをもつ父親と母親を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

調査対象は末子の年齢が3歳未満の子どもをもつ父母とした。居住地域は東京都内・都下及び千葉県である。

調査内容は主に次の4点から成る。

- 1) 調査対象に関する基礎的事項
- 2) 子どもや育児に関するストレス
- 3) 親役割に関する認識
- 4) 夫婦関係に関する認識

調査時期は1998年9月～11月である。

■ 研究結果

1. 調査対象

有効回答数

父親:117名(回収率52.0%)

母親:168名(回収率74.7%)

平均年齢

父親：33.3 歳

母親：30.6 歳

最終学歴

父親：高校 25.6%

専門学校・短大 8.5%

大学・大学院 59.0%

母親：高校 28.6%

専門学校・短大 48.2%

大学・大学院 18.5%

母親の職業

無職 79.8% 常勤 10.7% パート等 5.4%

2. 育児に対する意識とストレス

①父母間で共通した傾向

子どもや育児に関する意識を尋ねた項目（表1）のうち、父母ともに高い評定値を示したものは、「母親（父親）であることが好きである」「母親（父親）になったことで人間的に成長できた」「母親（父親）であることに充実感を感じる」「育児はやり直しができないから責任重大だ」である。次いで「将来子どもがいじめにあわないか心配だ」「将来子どもが非行に走らないか心配だ」といった子どもの育ち方に対する不安、あるいは「自然破壊が心配だ」という育児環境や、「この先、自分の仕事が上が

表1 親役割意識・子育て観と育児ストレス

	母親	父親	有意差
母親（父親）であることが好きである	3.464	3.547	
母親（父親）になったことで人間的に成長できた	3.731	3.197	***
母親（父親）であることに生き甲斐を感じている	2.677	2.376	*
母親（父親）であることに充実感を感じる	3.24	3.128	
育児はやり直しができないから責任重大だ	3.208	3.078	
子どもを育てることが負担じ感じられる	1.946	1.724	*
自分は母親（父親）に向いていない	1.934	1.595	***
母親（父親）であるために自分の行動が制限されている	2.935	2.316	***
女性が生まれながらに母性を備えている	3.072	3.296	*
母親の方が父親よりも育児が上手い	2.536	3.103	***
私は良い母（父）と思われたい	2.452	3.427	***
出世よりも家族や子どもの方が大事だ		3.351	
子どもが可愛く思えない	1.119	1.129	
この子を生まなければ（持たなければ）良かった	1.066	1.172	
子どもに対してかわいそうなことをしてしまったと落ち込むことがある	2.413	2.197	
子どもをどうしつければいいか、わからなくなることがある	2.607	2.457	
育児はもっと楽しいはずだ	2.435	2.133	
育児に対する親戚や近所の干渉が気になる	1.91	1.59	**
子どもに振り回されているような気がする	2.425	1.94	***
イライラして子どもを怒鳴ってしまう	2.353	2.06	*
イライラして子どもに手をあげてしまう	1.868	1.664	
自分は母親（父親）には向いていない	1.934	1.595	***
うちのついたおむつを替えるのは嫌だ	1.119	1.752	***
子どもは理屈が通じないので、相手にするのがとても疲れる	1.94	1.835	
将来、子どもが非行に走らないか心配だ	2.613	2.362	
将来子どもがいじめにあわないか心配だ	3.048	2.581	***
自然破壊（環境ホルモン・地球温暖化）が心配だ	3.202	2.915	*
不況がつづくことが不安だ	2.19		
この先、自分の仕事が上がっていくか心配だ		2.81	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

手く行くか心配だ」(父親)「不況がつづくことが心配だ」(母親)といった経済生活への不安に対して高い評定値を示している点は父母間で共通である。

②父母間で相違が認められる項目

父親は「私は良い父と思われたい」「出世よりも家族や子どものほうが大事だ」と、家族や育児に熱い思いを示す項目への評定値が高い。しかし、母親は「私は良い母と思われたい」という項目への評定値は必ずしも高くない。

一方、「子どもに振り回されているような気がする」「イライラして子どもを怒鳴ってしまう」「子どもを育てることが負担に感じられる」「母親(父親)であるために自分の行動がかなり制限される」「私は母親(父親)に向いていない」など、育児に翻弄され、苛立ちを示したり、育児に自信を喪失している様子を示す項目への評定値は母親の方が高い。同様に「育児はもっと楽しいはずだ」という思いも母親の方が有意に強いことが示されている。

③親役割意識の違い

父母ともに親であることを高く評価し、育児に強い責任感を覚えている点では共通であるが、育児や子どもに対する不安や苛立ちは母親の方が父親よりも強いという結果が得られたことは上記の通りである。その理由として、育児に関与している程度および親役割意識の相違が考えられる。本調査対象の母親は79.8%は専業主婦であり、平日は育児の大半を母親が担っていると考えられる。

さらに親役割に関して「母親の方が父親よりも育児が上手い」「女性は生まれながらに母性を備えている」として、育児を母親の役割だとする意識は母親よりも父親に強い。一方、「母親(父親)になったことで人間的に成長できた」「母親(父親)としてふるまっているときが、いちばん自分らしい」など、親としての自己を肯定している程度は母親の方が有意に強い。

また子どもについて不安や心配事の有無と育児ストレスとの関連をみた結果、「子どもを育てることが負担に感じられる」に対する評定値は不安有り群の方が有意に高いことは父母ともに共通である。

しかし、不安有り群の母親はそれ以外にも、「子どもをどうしつけたらいいか分からなくなることがある」「子どもがよく癩癩を起こすので頭にくる」「イライラして子どもを怒鳴ってしまう」「イライラして子どもに手をあげてしまう」など育児や子どもに対する苛立ち、あるいは「親戚や近所の干

渉が気になる」「子育てはやり直しができないから責任重大だ」「子どもが将来非行に走らないか心配だ」「子どもが将来いじめにあわないか心配だ」など、親としての責任や不安が有意に強い結果が示された。

一方、父親は上記の1項目以外は、不安有り群と不安無し群との間に、育児ストレスに関して有意差は見られない。

■ 結果の考察

昨今は育児に対する父親の関心を高めようとする動きが各方面で活発化している。「育児をしない男を父とは呼ばない」というキャッチコピーを掲げて厚生省が作成したポスターが話題を呼んでいる。そうした動向を背景としてか、父親の育児に対する関心はけっして低くはないようである。乳幼児をもつ本調査対象の父親も、自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示されている。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなつては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもってはいるものの、育児に追われる日常の苛立ちは、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であるといえよう。

(付記：本調査の実施にあたって、恵泉女学園大学4年水野圭子の協力を得た)

参考文献

- 1)大日向雅美「最近の子どもを愛せない母親」の研究からみえてくるもの：主として心理学における母性研究の立場から 家族研究年報No.20、20～31、1995
- 2)大日向雅美「子育てと出会うとき」NHKブックス、1999

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

育児期の母親の母親役割受容と家族関係に関する研究 —アイデンティティ葛藤と統合の視点から—

分担研究者 岡 本 祐 子
(広島大学教育学部助教授)

研究要旨 幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。本研究では、幼児をもつ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの統合・葛藤という視点からとらえ、母親役割受容と育児への積極的関与と家族関係の関連性について検討した。3～5歳の幼児をもつ147名の母親を対象に質問紙調査を行った。対象者は、Ⅰ統合型、Ⅱ伝統的母親型、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型の4タイプの分類された。主要な結果は以下のとおりである。

1) Ⅰ統合型の母親は、Ⅳ未熟型の母親よりも家庭生活によく満足しており、Ⅱ伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。

2) 家族とのかかわり方や家族の認知のし方は、4タイプ間で著しい相違が見られた。Ⅰ統合型が、夫を最も肯定的に受けとめており、育児や家族に対する積極的関与が最もよくできていた。Ⅳ未熟型は、夫・子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分である者が最も多かった。

これらの結果を総合して、幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

本研究の成果は、今後、育児への積極的関与を促進する家族環境に関する基礎資料として、母親・父親を対象とした啓蒙・教育へ活用が可能である。将来的には、父親・母親が育児に等しく関心と責任をもつ家庭経営実践へ発展させたい。

■ 研究目的

幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。そこで本研究では、幼児を持つ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティ、母親アイデンティティの葛藤と統合という視点からとらえ、①育児期の女性のアイデンティティ葛藤と統合の状態像について検討し、②育児期の女性における母親役割受容と家族関係に見られる特徴の関連性について考察することを目的とした。

■ 研究方法

1. 調査対象者

H市内のA幼稚園児の母親147名(平均年齢33.2歳、83.0%が核家族、76.6%が専業主婦)。

2. 手続き

①アイデンティティ尺度(Rasmussen,1964)、②母性理念質問紙(花沢,1992)、③家庭生活、夫との関係、夫の育児・家事への協力などに関する5ポイント・スケールの質問4項目、および自分の人生、生きがい、子育て、夫との関係などに関する文章完成法(SCT)6項目、からなる質問紙調査を行った。

■ 結果および考察

1. 母親役割受容から見たアイデンティティ様態の定義と分類

本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様

態を①個としてのアイデンティティの達成度と②母性意識の高さの2次元でとらえ、両者が個々人の中でどのように統合、あるいは葛藤しているかという視点から、4タイプを想定した：Ⅰ統合型(両者ともよく達成・獲得されている)、Ⅱ伝統的母親型(個としてのアイデンティティは低い、母性意識は高い)、Ⅲ独立的母親型(個としてのアイデンティティは高い、母性意識は低い)、Ⅳ未熟型(両者ともに低い)。

個としてのアイデンティティ達成度は、Rasmussenのアイデンティティ尺度得点の平均値36.56を基準に、37点以上を「高」、36点以下を「低」と見なした。母性意識の高さは、花沢の母性理念質問紙の得点の平均値93.85を基準に、94点以上を「高」、93点以下を「低」と見なした。

2. 母性意識の特徴

母性意識は、母性理念質問紙に対する反応をもとに検討した。母性理念得点は、すべての項目においてⅠ統合型、Ⅱ伝統的母親型は、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型よりも高得点を示した。この結果は、これら4タイプの定義から見て妥当なものである。

また各々の項目の得点を検討すると、4タイプ共通の特徴として、次のような点が見出された。全体的に肯定項目のうち、「子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである」(No.10)、「育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」(No.13)、「子供を産んで育てなければ女に生まれた

甲斐がない」(No.16)、「育児に専念したいというのが女の本音である」(No.26)や、否定項目のうち「育児は妻だけでなく夫もするべきである」(No.18)に対しては特に得点が低く、全対象者の平均値は、3.00未満の値を示した。これらの結果は、従来の母性理念、すなわち女性であることは即、よい母親であるべきであるという考え方を否定する傾向や、育児は女性だけがするものではないという現代女性の意識を明確に表している。このような現代女性の母性意識の特徴が4タイプに共通に反映されていることは注目すべきであろう。

3. 各タイプに見られる家庭生活への満足感・夫婦関係の関連性

家庭生活の満足感、夫の妻への理解の程度、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感に関する項目は、それぞれ5ポイント・スケールで評定させた。それぞれのタイプの得点は、表1に示した。分散分析の結果、家庭生活の満足感は、Ⅰ統合型がⅣ未熟型よりも、夫の妻への理解の程度は、Ⅰ統合型がⅡ伝統的母親型よりも有意に高い得点を示した($F(3,143)=3.50, P<.05$; $F(3,143)=3.77, P<.05$)。しかし、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感には有意差は見られなかった。

これらの結果は、Ⅰ統合型は他のタイプに比べて家庭生活への満足感が高いことや、夫からの理解の程度も高いと認知していることを示唆している。すなわち、家事・育児に対する夫の実際の協力という

表1. 各タイプ別に見た家庭生活、夫の理解、家事・育児に対する協力への満足感

タイプ	人数	項目			
		家庭生活の満足感	夫の妻への理解の程度	夫の家事・育児の協力の程度	夫の家事・育児の協力に対する満足感
Ⅰ統合型	M	4.32	4.08	3.80	3.76
	SD	0.70	0.85	1.11	1.07
Ⅱ伝統的母親型	M	3.85	3.45	3.40	3.34
	SD	0.77	0.78	1.11	1.05
Ⅲ独立的母親型	M	3.93	3.73	3.66	3.66
	SD	1.04	0.98	1.37	1.32
Ⅳ未熟型	M	3.74	3.57	3.85	3.34
	SD	1.01	1.03	1.16	1.23
Total	M	3.99	3.74	3.69	3.54
	SD	0.89	0.93	1.18	1.16
有意差検定		I vs. IV*	I vs. II*	n.s.	n.s.

* $p<0.05$.

次元ではなく、より人格的な次元において夫から理解されていると認識できることが、育児期の女性を支えるものであると推察される。夫が妻の生き方を理解し、心理的に支えていくことが、育児期の女性にとって母親役割を受容し、アイデンティティを統

合させていくことにつながると考えられる。

4. 文章完成法(SCT)の反応内容に見られた各タイプの特徴(表2、3)
SCT6項目に対する反応内容は、筆者の作成した

表2. SCT反応内容の分類の視点・基準

(単位：%)

SCT項目	分類の視点・基準	反応例	I 統合型	II 伝統的 母親型	III 独立的 母親型	IV 未熟型		
私の人生	Highest level	H	夫とともに歩みながら、自分自身も成長していくこと。 ・悔いのないように頑張りたい。	66.0	48.6	40.0	28.6	
	Lowest level	M	こんなものかなと思う。 ・子育てだけで終わりにたくない。 ・私のもの。	29.8	42.9	43.3	42.9	
		L	こんなはずではなかった。 ・どこでまちがったか。 ・この先、どうなるのだろう。	4.2	8.5	16.7	28.5	
	私の生きがい	Highest level	H	家族の幸せであり、仕事の充実である。 ・私を必要とする人のために頑張ること。	76.6	54.3	46.7	31.4
		Lowest level	M	これから見つけたい。 ・子供でもあるが、別のこともしたい。	23.4	28.6	26.7	31.4
			L	まだ見つかっていない。 ・何だろう。 ・考えたことがない。	0.0	17.1	26.6	37.2
子供を育てることは私にとって	Highest level	H	人生の課題であり、喜びでもある。 ・人生最大の仕事であり、私を大人に成長させてくれる。	80.9	68.6	46.7	31.4	
	Lowest level	M	あたりまえのことである。 ・楽しさ3割、試練7割である。	17.0	28.6	30.0	31.4	
		L	かなり大変な仕事である。 ・与えられた試練である。 ・義務である。	2.1	2.8	23.3	37.2	

表2. (つづき)

SCT 項目	分類の視点・基準	反応例	I	II	III	IV
			統合型	伝統的 母親型	独立的 母親型	未熟型
子供がいなかったら	Highest level 子育てに情緒的に積極的関与し、自分自身も成長したという親子の相互交流を示す記述内容。	H ・私の人生は今より淋しいものになっていただろう。 ・人の気持ちや痛みのわからない小さな人間になっていただろう。	55.3	68.6	36.7	48.6
	Lowest level 子供の存在から全く分離した子供とは無関係の生活の記述内容。	M ・体型もくずれず手の指も美しいままであっただろう。 ・淋しかったかもしれないが、気楽でよかったかもしれない。	17.0	14.3	23.3	14.3
		L ・別の楽しみをもっている。 ・もう少し自由に行動できた。 ・仕事を充実させていただろう。	27.7	17.1	40.0	37.1
私が母であるということ	Highest level 母親としての自分を積極的に受容し、親としての役割を一生懸命果たそうとする姿勢が見られる。	H ・子供たちは気にいらないかもしれないが、一生懸命やっている。 ・子供たちの最強の友人になりたい。	53.2	45.7	36.7	28.6
	Lowest level 母親としての自分を受容できていない。母親役割に対する否定的、消極的な姿勢が特徴的である。	M ・私の責務である。 ・女に生まれたのだから、当然である。 ・事実である。	34.0	28.6	30.0	31.4
		L ・未だに信じられない。 ・ほとんど罪である。 ・何かのまらがいではないか。 ・自分自身たよりない。	12.8	25.7	33.3	40.0
私にとって夫は	Highest level 夫を信頼し、夫婦としての相互交流が見られる記述内容。	H ・何でも話し合って共に生きていく相手である。 ・心の支えであり、最愛の人。 ・人生の最良のパートナーである。	80.9	62.9	53.3	43.0
	Lowest level 夫を拒否、または夫と理解しあえていないことを示唆する記述内容。	M ・必要である。 ・子供の父親。 ・空気のようなもの。	19.1	31.4	26.7	34.3
		L ・他人である。 ・暴君である。 ・あくまで子供の父親にすぎない。	0.0	5.7	20.0	22.7

H: high level, M: middle level, L: low level.